

李樹廷と日本キリスト教との関係

徐正敏

朝鮮のキリスト者として一翼を担った人物がまさに李樹廷である。李樹廷のキリスト教受容は、朝鮮プロテスタント史において知識人階層の受容においてその中心軸を成す。ここでよく比較されるのが、満洲でのキリスト教の受容過程である。すなわち、徐相輪^{ソ・サンユン}など『ロース訳聖書』の翻訳者によるキリスト教受容のルートが「民衆階層における受容」という特性を持っていることとは異なり、日本を拠点とした李樹廷などのキリスト教受容過程は、「両班・知識人における受容」という特性を持っている。このように、李樹廷は朝鮮プロテスタント史において最初の知識人キリスト者の代表格である。今まで彼に関する研究は、その生涯や活動、アメリカ宣教師による朝鮮宣教着手を勧告する宣教師誘致のための努力、そして特別な業績として聖書翻訳に関するテーマを中心に行われて来た。これらの研究は、朝鮮キリスト教受容史における李樹廷の立場を忠実にまとめ上げるテーマである。

本発表では、李樹廷のプロテスタント受容活動の土台、すなわち「コンテクスト」(context)になる当時の日本、日本キリスト教、そして李樹廷と関わった日本の助力者たちを中心に考察する。これは、朝鮮キリスト教受容史において日本が持っていた役割を一つの重要な関係軸として、どのような意義を持つのかを明らかにする作業になると考える。

朝鮮後期の1876年以降、朝鮮は日本と修交し何度か「修信使」を日本に派遣した。1881年4月には「紳士遊覧団」が渡日し、その団員の一人である孫鵬九^{ソン・ブング}は日本に残って東京外国語学校の朝鮮語教師として勤めた。「紳士遊覧団」の他のメンバー安宗洙^{アン・ソンス}は近代的な農業問題に関心を持ち、著名なキリスト者農学者であった津田仙に出会った。この二人の活動が李樹廷の渡日と日本での活動に直接的なモチベーションを与え、先行活動として大きな意義を持っている。近代農法を師事した安宗洙は、キリスト教を接する機会も同時に得ていた。その後、李樹廷は安宗洙が津田仙に会うことを願い、孫鵬九の後任として東京外国語学校の朝鮮語教師として活動した。李の渡日において、最も直接的な関係があったことは確かである。ついに李は、1882年9月の「壬午軍乱」が鎮まった後、開化政権が派遣した朴泳孝を代表とする修信使節の一員となり日本に渡った。李樹廷が朴泳孝の使節団に参加し、その後日本にとどまり近代文物に接触、学習する機会を得たのは、「壬午軍乱」当時危険にさらされた王妃(明成皇后)を救った功勞によるという記録と、彼の渡日、洗礼までの過程を記した史料が日本にも伝えられている。これを大部分の研究者が活用して来た。すなわち、1883年5月11日に発行された雑誌『七一雑報』第8冊19号(第3面)の内容である。この記録を現在まで李樹廷研究者がそのまま引用し、参考にして李の渡日経緯と日本でのキリスト教への入信、洗礼までの過程を研究してきた。

一方、李のキリスト教改宗以後、日本での彼の活動の中で最も比重があり重要な業績は聖書翻訳作業である。また、李は孫鵬九に続き、1883年8月から2年の任期で東京外国語学校の教師を務めた。この職場のおかげで、李は日本で安定した生活を享受し活動することができた。さらに、彼はアメリカのキリスト教界に朝鮮への宣教を請願する書簡を送り、これが宣教雑誌に載せられること

で朝鮮への宣教師派遣を触発した面でも大きな貢献を果たした。李のこの文章を、朝鮮に派遣された初期のアメリカ人宣教師たちは読んだに違いない。1885年、朝鮮に到着した最初のプロテスタント宣教師であるアンダーウッド (H. G. Underwood)、アベンゼラー (H. G. Appenzeller) などが朝鮮に渡る途中、日本に寄って李に出会い、朝鮮宣教に関するオリエンテーションを受け、彼が翻訳した『マルコによる福音書』を持って朝鮮に入ったということが定説になっている。

そして李は、在日期间中に東京外国語学校の教科書、学習教科書を含めて漢文小説『金鰲新話』の日本復刊に参加するなど聖書以外の著作活動においても功績を残した。1882年9月から李は約4年間日本に滞在した。帰国後の彼の動向は明かになっていない。これも今後の研究課題としてあげておかなければならないだろう。

李樹廷は、朝鮮のキリスト者であるのみならず、日韓キリスト教関係史における最初の人物である。また、彼は朝鮮におけるカトリック、プロテスタント両者のアイデンティティを持った人物でもある。また、アメリカの宣教師による朝鮮宣教の開始を導き、初代宣教師の来韓に関与することで韓米キリスト教の仲介者としての役割も担った。結局、李は互いに異なる主体との関係を成立させる使命を果たしたのだ。

本発表は、特に李樹廷と日本のキリスト教との関係、さらには日韓キリスト教の初期関係史の観点に留意した。もちろんこの時期の朝鮮キリスト教の実体は存在しなかったが、李樹廷時代の日韓キリスト教の関係は肯定的なものから出発した。日本の初期のキリスト者たちは李樹廷を一人の実例と考えながら、自分たちにとっての宣教者として、さらに根本的にはキリスト者としての使命を見つけたと言える。しかし李樹廷時代、まさにその直後から日韓の間には歴史的に不幸な関係が始まり、日韓キリスト教関係史も暗黒期に入っていった。日本のキリスト教は、結局長い間、日本帝国主義の朝鮮侵略において先頭に立つ役割を果たしたのである。すなわち、国家に隷属したキリスト教として、総体的に国家目標を優先視する屈辱的なキリスト教会の特性を見せた。

しかし解放以後、一定の期間が経ち、日本のキリスト教は新しい覚醒時代に入った。特に、1967年「日本キリスト教団」議長名義で発表された「第2次世界大戦中の戦争責任告白」以後、その動向は確実に変わった。これを基点として日本のキリスト教は、日本社会で苦しんでいる少数者へ関心を示しつつ実践したが、その最初の対象者が差別を受ける「在日コリアン」であった。そして、その後、朝鮮の進歩的なキリスト教が民主化運動と統一運動に力を傾けた時代に、日本のキリスト教は新しい日韓キリスト教関係史を形成し始めた。朝鮮のキリスト教における正義を求める闘いに犠牲的な協力を惜しまず、あらゆる手段で献身した。この時期、日韓キリスト教関係史において歴史上第二、第三の李樹廷が登場し、彼らはまた日本のキリスト者の協力と同志として友愛を築きつつ自分たちの時代的使命を果たしていった。また、李樹廷時代には、彼が日本のキリスト者たちと日本駐在宣教師の窓口として、アメリカの教会に朝鮮宣教を要求したように、民主化、統一運動時代の朝鮮のキリスト者たちは、日本のキリスト教を窓口にして世界教会に向けて朝鮮のキリスト教

の良き目標に対する理解と援助を求めることができた。

李樹廷時代には、肯定的な関係史により歴史の開始を見せた日韓キリスト教は、長年の桎梏の時代を経て、また新しい時代に第二、第三の李樹廷と共に新しい日韓キリスト教関係史を樹立して来た。このような観点から李樹廷と日本のキリスト教、日本の初期キリスト者との関係を考察することが最も有効な観点の一つと考える。

参考文献

- 『七一雑報』、1881年11月25日。
 『七一雑報』、1883年5月11日。
 『七一雑報』、1883年6月1日。
 「天主教朝鮮に入事実」、『福音新報』（関西）、第1冊第7号、1883年8月14日。
 小川圭治・池明観、『日韓キリスト教関係史資料』（1876-1922）、新教出版社、1984
 『東京外国語学校沿革』、1932。
 “Rijuteis Appeal for Missionaries, Yokohama Dec. 13, 1883,” *The Missionary Review*, vol. VII, 1884
 吳允台、『朝鮮基督教史IV-改新教傳來史 先驅者李樹廷編』、恵宣文化社、1983。
 任展慧、「李樹廷の活動」、『日本における朝鮮人の文学の歴史』、法政大学出版局、1984。
 李光麟、「李樹廷の人物과 그 活動」、『史学研究』、朝鮮史学会、1986年9月。
 金태준、「李樹廷、同胞의 靈魂의 救濟를 위한 念願」、『翰林日本学』第2巻、翰林大学校日本学研究所、1997。
 金秉喆、“李樹廷 譯刊의 「신약마가전복음서언해」 研究、”『象隱趙容郁博士頌壽紀念論叢』、1971。
 金成恩、『宣教と翻訳-漢字圏・キリスト教・日韓の近代』（東京：東京大出版会、2013）。

研究業績

徐正敏

{著書}

- 『韓国カトリック史概論—その対立と克服』、かんよう出版、2015
 『親日と抗日を越えて—日韓キリスト教史から学ぶ新たなパートナーシップ』、日本聖公会、2015
 『信仰の痕跡—日本の関東と関西を中心に』（共著、ハングル）、韓国キリスト教歴史研究所、2015

{論文}

- 「戦前、戦後韓国教会の受難」（ハングル）『神学と教会』、ヘアム神学研究所、2015. 6
 「李樹廷と日本キリスト教」（ハングル）『韓国キリスト教と歴史』、韓国キリスト教歴史研究所、2015. 9

- 「1945年前後韓国キリスト教の受難—信仰と良心の圧制に対する抵抗、屈折と懺悔の問題」、明治学院大学キリスト教研究所紀要、2016年2月掲載予定
- 「李樹廷と日本キリスト教との関係」『カルチュラル』明治学院大学教養教育センター紀要、2016年3月掲載予定

{学会発表}

- 「李樹廷と日本キリスト教との関係」李樹廷の「マルコによる福音書」出版130周年記念国際学術シンポジウム、東京、2015. 6. 30
- 「キリスト教と戦後70年—韓国キリスト教との関係と比較—」日本基督教学会第63回学術大会シンポジウム、東京、2015. 9. 15
- 「1940年代日本キリスト教とファシズム国家体制との関係研究—アメリカ・メソジスト教会の現地報告と状況認識を中心に—」キリスト教史学会第66回大会、東京、2015. 9. 18
- 「ファシズム絶頂の時代における日本キリスト教に対するアメリカ側の認識」アジアキリスト教史学会第8回学術大会、ソウル、2015. 10. 31